

# 若いハイネ

——ハイネ伝のために——(6)

木本 欽吾

## ゲルデルン家からハイネ家へ

最初に、本題を離れた小さい報道をさしはさんでおきます。昨年6月のものですが、同じ雑誌に、ハインリヒ・ハイネの見出しがその月録(Chronik)欄に掲げられていたのです。<sup>1)</sup>一つは、ハイネの記念碑が立つというお話。場所はハンブルクで、その市庁舎に新しく広場が造られ、その一角に設けられる予定。製作者は、たしかハイネがその地に足をとめたことがあるように思われるヴォルプスヴェーデの彫刻家 W. Otto さん。ハイネの旧記念碑は、第二次大戦の始め頃、ナチ党员によって破壊されたのです。もう一つは、デュッセルドルフの大学に、ハインリヒ・ハイネの名を冠することについてです。これは十数年も前になりましたか、一度あったことですが、今度も同大学協議会で激しい意見の交換の末に、またもこの事は否決されたというのです。ただ、投票数の状況は、41対44だったといわれています。これは、前回と比べて、賛否の差がすこし詰ってきているのではないかと思います。このニュースのライターは、これは、ハイネに対するドイツ人の理解が、相も変わらず十分に行きとどかないであることを示すシルシと言えるのではないかと、疑問符を打っています。記念碑を建てることと、ハインリッヒ・ハイネ大学と命名することとは、違った面を持っていると見ることもできますし、同じ事ではないかとも考えられます。記念碑再建は、ハンブルク市会の決定、つまり、ハンブ

1) Westermanns Monatshefte, Juni/1982.

ルク市民の賛成があったからでしょう。通算すれば、ハイネはハンブルクで最も長く生活したのですから、ここが故郷と言えます。大学名については、キャンパス内の教職員、とくに教育・研究に携わる人たちによって、この事の是非が決定されたのでしようが、その経緯は、票数が示すよう、大接戦で、協議会員の心の動きには、微妙なものがあつたとうかがえます。デュッセルドルフにハイネが過ごした期間は、すでにこれまでに述べてきましたように、実数から言えば15年足らずもので、それも幼少の時期です。しかし、この町は、後の詩人ハイネに、いくつもの影響を及ぼす事柄、外側から言えば、革命フランス、皇帝ナポレオン、内側から言えば、ハイネ家とファン・ゲルデルン家の伝統、それらが少年ハイネを培ってゆく大切な心の故郷です。ここを引き払ってからは、ほとんどこの地を訪ねていませんが、これも前述のように、大学生となって、ベルリンからこの町並の昔をしのぶためにやって来て、「ここは私の生れた町」となつかしんでいます。ハイネの生れた最初の家がフォルカー通りに、「記念の家」として今日も残っており、ハイネの資料と研究のセンターが、そこからそう遠くないところにあります。こういう点では、ハンブルク市に負けない、ハイネを記念するには相応しい、今日もハイネの生きた脈搏に触れることのできる町ですので、ただ大学の関係者だけでなく、デュッセルドルフ市民の声も聞いてもらいたいような気がします。ですけれども、こう書きながら、せっかく建てられる記念碑が、またいつの日かクレーンで引き倒される時が来ないとも限らないし、せっかく詩人の名を冠した「ハインリッヒ・ハイネ」大学名も、同じような運命にでくわすやもしれない、そんな奇怪な思いが、筆者の頭をかすめ去ってゆきます。いずれにしても、と言うのは、たとえ破壊されたり、その名を削り取られる日が来ても、ハンブルクとデュッセルドルフの町と、ハインリッヒ・ハイネの名とは、ドイツ本国の人たちのその時その時の言動を超えて、多くの世界の人たちからさし伸べられる手で、いつも堅く結びつけられるでしょう。それは、詩人ハイネにとっては思いがけないことかもしれませんし、あらかじめ予知されて

いたかもしれません。そうして、この事は、詩人ハイネにはやはり大きな喜びであるにちがいありません。と同時に、ハイネは、自分の作品がいろいろな問題性を含んでいるために、ドイツの同胞にさえも、十分に理解してもらえないことを残念に思うでしょうが、20世紀を超えてまでも、世界の各地で読みつがれることに満足するでしょう。たしかに、ドイツの同胞の、ハイネへの理解は、たとえばゲーテへの理解のように、円滑に進めないところがあります。それは、後に筆者も本稿で見る機会があるのですが、ハイネ自身が巨匠ゲーテと新進、若輩の自分とを比較しながら、二人の間の相違点を自覚しているのです。割り切って言えば、この相違点が、ハイネ理解を、賛否のいずれかの道へ人びとを導く分岐点にもなります。

上のような事情に加えて、いま詩人ハイネの座を現代に据えてみますと、その理解の道を歪めかねぬ状況が一、二点見えてきます。今日の西ドイツにも、第二次大戦のユダヤ人迫害など、いまさらそれを持ち出されても、それはもう過去の事、というムードがあるようです。それでいて、頑固なユダヤ人嫌いが根づよくあることを思うと、問題は混み入ってきます。これはわが日本国でも、変なところで、いわゆる異民族に対する姿勢に、共通点があると思われまふ。まさか、一つの民族の純血性、優越性という防壁に因るものではないでしょうが……。とにもかくにも、ソヴェート嫌いとか、アメリカ嫌いとかの抜きがたい偏見は、生きとし生ける者、中でも最もすぐれているはずの人間の、生れながらの業でも言うべきでしょう。西ドイツには今日、数えるほどしかユダヤ人は住んでいないようですが、過去のユダヤ人の亡霊だけは、そのまま忘れられないで生き残っているということになります。さらにつけ加えられねばならぬのは、人間の隣人愛ならぬ隣人嫌いという根性で、西ドイツに万一、かつてのフランス嫌いみたいなものがあるとすると、詩人ハイネは、人間の業にがんじがらめになって、人びとの眼を、そのほんとうの詩の心を集める隙間もそこにはないことになるでしょう。ただただ、詩人ハイネを理解するのには、いくつか障害があるというだけで、それを排除してゆこうとする人たち

が、世代を新らしくするごとに増えてくることを信じるほかはありません。余計な前置きはこれくらいにして、本論をつづけます。

前稿(5)で、少年ハイネの母の生れたファン・ゲルデルン家の人たちについて、始祖ヤーコブ・ファン・ゲルデルンから、少年の祖父ゴットシャルク・ファン・ゲルデルンに及ぶ六代の父祖たちの横顔を見てきた。時期にして、十七世紀始めから十八世紀終りに及ぶ、約150年間であった。この間の最も大きき歴史上の事件は、キリスト教世界で争われた新旧両教徒の覇権争いである、いわゆる30年戦争(1618—48)と見てよいただろう。もちろん、それは政治、やがて経済の主導権を巡る争いと無関係ではなく、戦争終結のあとには、フランス、イギリスが勢を強くしてくるのに反して、戦場となったドイツ帝国は解体し、諸侯は分立し、荒廃した国土だけが残る。フランス、イギリスに大きく立ち遅れる、みじめなドイツの時代が続くのである。一層みじめであったドイツのユダヤ人たちについては、前にも述べた。前稿の終りで紙上に現れた、少年ハイネの大伯父シモン・ファン・ゲルデルンは、こういう時期に春青を過ごし、やがてフランスにルイ十四世による絶対君主制、イギリスに議会制による君主制が生まれ、遅ればせにドイツに啓蒙君主制が登場しようとする、その頃までを生きただのである。前稿で見たように、ローゼンタールの考証によれば、その正確に近い生没年は1720—88となる。これらの君主たちの政治と戦いの背景には、経済の実力者となる少数の新しく裕福な市民がいた。啓蒙主義の時代は、人間中心に、物を考え、物を造る機械を考案し、流行病を防ぎとめる手段によって医学を進歩させる、新しい思想と新しい科学とを生み出す足固めをした時代である。大伯父シモンは、まだそのうちのどの一つも身につけることはできなかった。ただ、今で言えば、世界中を足で駆けづり廻って、新しいものを探求したとってよい。その意味では、多くの女性たちにめぐり合い、彼女たちとともに苦しみ、しかしまた喜んだであろう、ということ、修道院長グレゴアールの知恵袋になって、同信の同胞たちの解放のために一臂の力をかしたということ、この二つをもって命冥加

としたかもしれない。晩年春に一度、故郷のデュッセルドルフにたちもどるのだが、父ラツァルスの生存期とのかかわりなどわからぬ。あるいは、身内の悼報でも聞いてのことだったかもしれぬ。前稿の後半で、このシモン・ファン・ゲルデルンへの手がかりとして、M・プロートの「東洋人」の項を挙げたが、ときどき併読しているL・マルクーゼの「ハイネ」評伝は、ただ「回想記」を読み砕いて紹介する程度でしか触れていない。この著者の「ハイネ」への照準が、副題にあるように、その初期の詩人像に「ハイネの憂鬱」(Melanchoriker)の名を興えるという方法なのだから、大伯父シモンに長くかかずらわる暇はないだろう。ただ、シモンにも「憂鬱」の影が濃く、それも当時の同信者たちの心を暗くするものよりも、いっそう深い闇の中に、シモンが立っていると思われ、こうして、その一代後の甥ハイネの憂鬱とは、「回想記」の言葉どおり、不可分の共通性をもっている。ハイネの憂鬱は、フランスのほぼ同世代の詩人たちのそれと同質でありながら、シモンについて理解されるような、ユダヤ人として持って生れた異質性も加わっている。そう思いながら、シモン・ファン・ゲルデルンのことをまだ筆者は書きつづけている。マルクーゼにしても、けっして上のことを忘れていたのではないが、その締めくくりを、ハイネの生涯に影響を及ぼした三人のおじたちのうち、ファン・ゲルデルン家の二人のシモンは、少年ハイネのいくつかの夢を育てたし、ハンブルクの叔父ザロモン・ハイネは、少年ハイネの身体と世間的な常識を育てた、と述べ終わっている。<sup>2)</sup>これで過不足はない、誰だ、余計なシモン論をするのは？ そう非難する声もあるだろう。マルクーゼの勝れた筆くばりを、筆者は忘れていたわけではなく、楽しく読ませてもらっているというのが、事実である。しかし、さらに簡単に、M・ウィントフーアは、大伯父シモンを視野の外においたままにしている。もちろん、これも副題一革命と省察一を見れば肯けるところがあるだろう。第一に、筆者が拠り所としている「回想記」そ

2) Ludwig Marcuse, 前掲書 S. 53.

のものが、傷だらけの記録である上に、それだからますます、詩と虚構と、誇張を取りまぜており、典拠としての信憑性に欠けている、そういう出発点の相違が筆者との間にはあるだろう。まるで別のコースを走っている二人かもしれぬ。あの山に登るのにあるいは見るのに、道はいくつもあるという、そういう言葉どおりではなく、詩人ハイネへの理解にも、たしかにその道はいくつかある。ただ、ハイネ自身が、自分の作品が矛盾を多く含んでおり、極端に言えば、どの作品も未完であり、未完であることに、一つの意味がある、と考える人である。そこへ到達しても、山はないのだ、という厄介なことになる。第二に、本稿の最初にも述べたように、M・ヴィントフーアは、詩人ハイネとユダヤ教、それにはさほど関心を寄せていない。上述の、M・ブロートはもってのほかということになるだろうし、L・マルクーゼのハイネ評伝の中の、少年ハイネへのユダヤ教の影響評価も過大だとする人である。詩人ハイネ全体像の中で、ユダヤ教は決定的な要素ではない、その事は明らかである。くどくどして言えば、すでに明らかであるとされている、その事を明らかにしようとするのが、「ユダヤ教詩人としてのハイネ」論である、と筆者は思う。

さて、少年ハイネの大伯シモンについての筆を折る前に、シモンの生きた時代、といえど主として1740～90年、十八世中葉の頃の、ユダヤ教の趨勢を見ておきたい。それは、シモンの行動に即しながら、一部は触れておいたものであるが、その思潮が、十九世紀へ向って羽ばたいて行く、ハイネ家、ファン・ゲルン家、当面は特に後者へ、その中でも少年ハイネの母ベティーの世代へ大きな変化を与えることからである。前段に述べられた、M・ヴィントフーアが、M・ブロートとL・マルクーゼのユダヤ教への傾斜過剰を指摘している下りに、続いて次のように言うのも、これと同じ論調がうかがえる。デュッセルドルフには、<sup>3)</sup> フランクフルトとはちがって、ユダヤ人の特別居住区域（ゲッター、Getto）はなかった。だから、ハイネは、同時代の他のユダヤ人のように、ゲッターの中で育ったわけで

3) Manfred Windfuhr, 前掲書 S. 7.

はない。つまりこの町では、キリスト教徒もユダヤ教徒も共同生活をして  
いた。少年ハイネが、学校へ行くようになって、同級生と別に変った条  
件などなかった。<sup>4)</sup>後に詩人ハイネが報告しているように、やがて進学した  
高等学校長は、よく両親を訪ねて来た。父ザムゾンも、ユダヤ教区世話  
もするし、同時に町の人たちの中へもはいてゆき、キリスト教徒の市民  
と手を握り合っていた。少年ハイネも、父と同じであった。こうしたところ  
から、少年は、ユダヤ人としては、例外的な少年生活を送り、フランス  
占領軍の教育制度の下で、フランスの子にもならなかったし、といて正  
統派のユダヤっ子にもならなかった。もちろん、少年ハイネは、ユダヤ教  
の影響圏外にいるわけにはいかなかった。これは、この時代の自由な考  
え方を持つユダヤ人はみなそうであって、二つの生活ゾーンの中に生きて  
いた。少年ハイネは、ユダヤ人の生活慣習、ユダヤ人の考え方を学び知  
った。厳格な信仰に根をもつ、ユダヤ教の祝祭、儀式、祈禱などをいつま  
でも忘れなかったが、また、キリスト教の風習も身につけてゆくのである。  
以上の、M・ヴィントフーアの所論は、M・ブローとL・マルクーゼの  
裁断の缺がねじている部分を、まっ直ぐにしたところである。もしそれ  
が、少年ハイネを理解する最も正しい、つまり折中線ではなく、いわば正  
中線に立つ人の意見だとすれば、何もこれに加えられるべきものはないだ  
ろう。しかし、人間は、そうして詩人ハイネは、すぐ前に述べたように、  
折角登りつめて征服したはずの山頂に立ったとき、岩石の群があり、他の  
山々が見わたせるだけで、目的の山は登山者の足もとに静かに、あたかも  
地平線上に眠っているかのようで、その姿は捉えようもない、下山の道み  
ち、仰ぎ見ると山の在ることに気づく、それに似た存在になることがあ  
る。それは、ひとり人間、詩人の問題だけでなく、むしろその当時のプロ  
シア＝ドイツ国家についても言わねばならぬことである。父ザムゾン・ハイ  
ネと一家が、デュッセルドルフを立ち去らねばならなくなる頃、「ヘップ、

4) 「回想記」中の、あの「ぼくのおじいさんは、大きなヒゲをはやした小さなユ  
ダヤ人」事件には、まっく触れられない。それは、作り話なのだろう。

「ヘッブ！」の声にも追われたことを思い出し、やがて少年ハイネが行くハンブルク周辺のユダヤ人の環境を知らされると、M・ヴィントフーアの説明するデュッセルドルフの町は、遠い昔の夢にすぎぬような気がする。それにもかかわらず、その意見は、深い傾聴に値することには変わりはない。

十八世紀末から、十九世紀初めへかけて、ナポレオン支配下のフランス革命軍の最後の拠点となったデュッセルドルフの町と、そこで居住の自由を与えられたユダヤ人たちとは、ドイツ国内での例外的な存在であった。少年ハイネたちの例外的な地位もここに由来している。だが、後にすぐ見られるように、デュッセルドルフのユダヤ人たちは、居住について真の自由を与えられてはいなかった。ナポレオンの没落後、ベルク公領が、プロシア支配圏にもどると同時に、ユダヤ人たちに加えられる生活上の制限も、フランス革命軍の解放以前と同じ軌をたどる。M・ヴィントフーアの言う、デュッセルドルフの解放は、見せかけのものであって、ナポレオンの威勢のもとにあった十数年間にすぎない。少年ハイネがここで、若者の意識を持って過ごした期間は数年にも足りない。けれども、この短い年月は、よく「デュッセルドルフ、それは私の故郷の町」とのちのちも言われるように、詩人ハイネの心に深く刻み込まれた、かけがえのないほどの少年期であった。いづこの国、日本でも、たとえば、敗戦となった第二次大戦の時代を少年期として育った者の場合も同じである。少年ハイネにとって、この時期は「古き、よき時代」ではなく、「新らしき、よき時代」であった。この「新らしき、よき時代」の地図をこまかく観察すると、「回想記」の中の言葉、「生き霊、わたしの分身」である大伯父シモンの顔が浮び上って来る。そうして、少年ハイネ、愛称ハリーの顔と重なり合っているのだ。「回想」文には：わたしは大伯父のあてのない長い旅、彼のでくわすさまじまの運命のことを思って、われを忘れてしまい、明るい真昼間に、ぞっとするような気味悪さにとらえられることが幾度かあって、まるで、わたし自身があの亡くなった大伯父だ、そうだ、あの人の生涯の続きを生きているのが、このわたしだ、そんなふうに思われた。夜の夢にもそれはつづ



いて現われ、この大伯父なしに自分は存在しない、ただ同時に、自分は大伯父とは別の人間だ、別の時代の子だ、そう気づいて、身体から血がひいてゆくような恐怖感に襲われる。シモン・ファン・ゲルデルから渡されたバントを握って、ハリー・ハイネは走る恰好になっている。バントには、「放浪と運命」の刻印がある。その裏側に、「新らしき、よき時代」。前者はハリー・ハイネが書いたもの、後者は大伯父シモンのメモ帳から写し出されたもの。前述のヴィントフーアの「ハイネ」論からの解説文の中ほどに、「例外的存在」と見なされている詩人ハイネについて、これを、若いハイネが青年期を過ぎるころから、おそらくこれは「青年ドイツ派」(Das junge Deutschland)の仲間に加え入れられる頃から、詩人として「異常な」立場を取ることに関連づけて、だが、若いハイネは、こうして成長していても、けっして「フランス人」にも、また、その本流を汲む「ユダヤ教徒」にもならなかった、と言っている。この「フランス人」、「正統派ユダヤ人」は、この文脈内の言葉である。詩人ハイネが、一種の「異邦人」にはならなかったというのは、単に少年期のフランス占領下のリュツェウム(Lyzeum)での不完全な教育ばかりでなく、青年期にはいと間もなく、「パリへ!」と口走り、ついにパリの人となる、ほとんどその全生涯にかかわって述べられている。また、これは詩人ハイネが、生涯を通じて離れることの出来なかったユダヤ教に対する立場全体にもかかわっていると思われる。この「例外的存在」としての詩人ハイネは、ハンス・マイヤー(Hans Mayer)によって、さらに広い比較文化的視野の中で、「アウトサイダー」(Außenseiter)、「スキャンダル」(Skandal)現象として、鮮かに描き出されている。<sup>5)</sup>だが今は、ここに足をとどめるわけにはいかない。冒頭に、詩人ハイネとデュッセルドルフ大学、ハンブルク市記念碑念再建の噂話をさしはさんでおいたが、とくにデュッセルドルフの大学の事については、このヴィントフーア教授がかねてから関心を寄せられていると、筆者は思っている。若いハイネは、フランス人にも、また正統派

5) Hans Mayer: Außenseiter, Suhrkamp Verlag 1975.

ユダヤ人にも成らなかつた、という言葉は、この記事の担当者の、ドイツ国民のハイネへの理解は、依然としてはかばかしくいいていないのでは……?という言葉への補注、あるいは、一つの回答と受け取ってよいだろう。詩人ハイネは、その半生をフランスで過ごし、フランスの人たちから公私にわたってあつい好意をうけ、ドイツを足蹴にすると、誤解されるような言動に走ることがあったが、けっしてドイツを忘れ去り、故国に弓をひいたわけではない。フランスを愛するように、ドイツを愛した。いや、フランス以上に、ドイツをこそ愛した。なぜなら、詩人ハイネはそこで生れたからだ。わけても、愛する母がドイツにはいるからだ。また、ユダヤ教の世界に閉じこもり、キリスト教への敵対を押しとおしたわけでもなく、宗旨替えをして、キリスト教徒たちと同等の権利を手に入れようとした。詩人ハイネにとって、ドイツ人、あるいは、フランス人であること、一つの民族に所属するかどうかは、どうでもいいことであつたし、また、ユダヤ教徒、あるいは、キリスト教徒であること、一つの宗派に所属することも、どうでもいいことであつた、——そのように言ってよいだろう。王政復古(Restauraton)の時代にはいるにつれて、プロシア(ドイツ)国民意識は強まり、それは反動的に、ユダヤ人排斥の傾向を増強し、逆にユダヤ人の抵抗を産み出す。改宗は、ユダヤ人に良心の苛責を強く与えつづける。中世期では、ユダヤ人の中から、少数のほんとうの改宗者も現れることがあったが、偽装の改宗者、改宗に死をもって対決した者が大多数であつた。時代と共に、ユダヤ人たちの生き方は、大きく変つて来る。その変動の中を、大伯父シモンがまず生き始めたのである。詩人ハイネの「回想」は、ローゼンタールが入手した詳細な資料なしに、ほとんど直感的に、大伯父シモンが、ユダヤ人として、そうして何よりも人間として、自分の歩いて来た道の先導者であつたことを、ローゼンタール資料以上に捉えているときえ思われる。

シモン・ファン・ゲルデルン型の人物が生まれ、その後につづいて少年ハイネが育ってくるまでの、ユダヤ人の世界を簡単に見ておきたい。前に

もあげたシーセル・ロスの「ユダヤ人の歴史」は、ルネサンスと宗教改革との大きな影響を通りぬけて、新しい時代の入口にかかる、ユダヤ人たちにとっての黎明期を、1492—1815年としている。<sup>6)</sup>イタリアのヴェネチアに始めて、ユダヤ人を強制的に狭い区域に居住させるようになるのは、1516年であった。それから300年も、この「ゲットー」と呼ばれる、差別された居住区域は、西ヨーロッパの各地に存続した。そこには、必ず教会堂と付属の学校があり、ユダヤ教義とユダヤ人の生活、慣習を教授し、訓練する場となる。福祉と慈善の活動組織が活発に行われる。外敵を防衛するには、好都合な閉鎖社会であるが、さまざまな生活上にうける制限、禁止は、ちょうど日蔭の小さい植物のような人間を造り出すことになる。たえず迫害への恐怖心をもって、制限された生活手段の前では、ずる賢く生きねばならない。こうした、ユダヤ下層民にもしだいに、ごくゆるいテンポで前進と後退を繰り返しながら、薄日が射しはじめる。上述の1492年という新時代の開始時期は、何を指しているのだろうか。1815年は、これまで述べたこと、とくに、まだ例外的であったが、ベルク公領地方を見れば分る。二つの門だけしかまたぬ、ゲットーの厚い壁が壊れてゆく、つまり、ユダヤ人閉鎖社会が崩壊し、広いキリスト教社会との交流をもつようになる時代である。最初の1492年は、当時の西ヨーロッパで、ゲットーに押し込められず、比較的に自由な生活の出来たユダヤ人グループで、スペイン、ポルトガルに住んでいた、マラノ (Maranno) と呼ばれる「隠れユダヤ教徒」が活動を始めた時である。石田友雄著「ユダヤ教史」に拠ると、このグループは、スペインのユダヤ人追放の年、1492年から、信教の自由が認められ、自由な商業活動が許される地域を求めて、点と線をつなぐようしながら、オランダ支配のアムステルダムなどから移住をつづけてゆくのである。表むきは「クリスチャン」に変身して、機をみて「ユダヤ人」に戻ってくる。1600年代にはいると、商業中心地を根拠として、「マラノ」の子

6) シーセル・ロス：前掲書 170—9頁。

7) 石田友雄：ユダヤ教史，山川出版社 1980，229頁。

孫たちは、ユダヤ教の伝統を内部から批判する「近世のユダヤ人」の姿となって現われ、オランダの東インド会社発行株の四分の一を掌握して、初期資本主義の担い手になる。また、この「マラノ」集団は、その信仰生活において、かつてスペイン、ポルトガルに移住していた頃は、キリスト教会の厳しい規制を批判することは、同時に、本来のユダヤ教を護持してゆくことであったのに、各地のユダヤ教会堂の門をはいてみると、ここでも、キリスト教会と同じような厳しさで、個々の人間を束縛してくると気づく。これまで、ユダヤ教を批判する者は、キリスト教に改宗した背教者であった。しかしいま十七世紀に登場したマラノ派ユダヤ人は、キリスト教と並べてユダヤ教をも批判する。言いかえれば、そうした宗派を乗り越えて、未来の、新しい宗教を探求する、もう一度言いかえれば、宗教に対して無関心な、何よりも自らの「人間」としての存立を可能にする、「個人」の自由を前面に押し出して主張し続ける「近代人」の原型であった。マラノ派の人たちが移住して行く地域を見ると、後にシモン・ファン・ゲルデルンが遍歴の旅をするコースとよく似ている。地中海沿岸、北アフリカ、イタリア、フランス(ボルドー)、イギリス(ロンドン)、ドイツ(ハンブルク)。ロンドンでは、最も大きいこの派の集団が形成される。また、ボルドーでは、これらの人たちは「新クリスチャン」と呼ばれ、公にユダヤ人であることを認められ、その他のフランスの地方でも、安全で自由な居住地を与えられている。また、これは東ヨーロッパに多く輩出したのだが、オランダで、この派出身で、「カバラー」に属する神秘的な傾向をもつユダヤ律法学者が、霊術師として尊敬を集める現象がみられる。ロンドンには、公に招かれて、その神がかりの冥想術を披露する者さえあった。30年戦争の頃の不安定な世情は、とくに、ユダヤ人の下層部の人たちの間に、「メシア」を待望し、その実現を願う傾向を強めていた。さらにもう一つ、この派の人たちは、その盛んな商業活動と、それに伴う資財力と、各地にもっている連絡網を通じて入手することのできる新しい情報提供者として、それぞれの政府機関に重宝がられる。シモン・ファン・ゲルデルンが、

アラノ派の人たちの中に立っているよう思われる。30年戦争が終ると、絶対主義的な王侯制と、イギリスを先頭とする重商主義経済体制とは、ゲッターの中のユダヤ人たちにまで手を伸ばす為政者たちが、いわゆる「宮廷」ユダヤ人を作り出す。ハイネ家のイサーク、ゲルデルン家のユスバ、ラツァルスたちの時代のことである。

十八世紀にはいると、近代的ユダヤ人のマラノ派の人たちの蒔いた種子は、この時代の風に運ばれて、とくにこの世紀後半へかけて、ユダヤ啓蒙主義、「ハスカラー」運動となって開花する。新ヘブライ語に由来する「ハスカラー」(Haskalah)は、啓蒙、教化の意味をもつ言葉だが、悟性あるいは知性が原義であり、後に出る「マスキリーム」と共に、カントやデカルト哲学の影響をうけている。シモン・ファン・ゲルデルンが親しかったアベ・グレゴアールをはじめとして、すでにマラノ・ユダヤ人たちも、ヨーロッパの文化に強い関心をもっていた。彼らは、ユダヤ文化をゲッターの中で抱きかかえていた、一般のユダヤ人と比べれば、いわばユダヤ・エリートである。これらの少数エリートたちは進んでこの運動の中へはいり、大多数のゲッター・ユダヤ人たちにヨーロッパ文化を教え込むことが、この人たちをゲッターから解放する前提条件と考える。これらエリートたちは「マスキリーム」(Maskilim 考える人)と呼ばれる。ゲッター内生活者は、ユダヤ文化・思想以外のものを知らず、それ以外の精神活動の流入に対して防禦力をもたなかった。ヨーロッパの精神は強い浸透力をもつ。ユダヤ啓蒙主義者の、教育の具体的なプランは、近代ヨーロッパの文化、思想、科学を受け入れ、ユダヤ教義に則った伝統的なカリキュラムを最少限にとどめる、世俗的な教科を取り入れることによって、ユダヤ青少年たちの教育を拡大し、ゲッター内で生まれた狭まいた視野へ新しい刺激を注入することであった。まずそれは、ユダヤ人特有のイディッシュ語をやめて、それぞれの居住地に使用される、ドイツ語、フランス語に変えてゆくことから始まる。ハスカラー運動の基本には、遡れば、マラノ派の流れを汲むスピノザ (Baruch Spinoza 1632-77) の伝統的なユダヤ思想と、マラノ

・ユダヤ人集団の商業を重視する実践活動に反抗する、徹底した合理主義が張りつめられていた。そうして、一方では、すべての新しい運動と同じように、誤った指導方法と性急な強行方針とは、失敗を繰り返し、この運動の成果が達成されるのは、今世紀にはいつてからという、長い時間を必要とした。前にも述べたように、ドイツの中心的な指導者は、モーゼス・メンデルスゾーンである。ハスカラー運動の推進者たちは、この人の周囲に集まり、単純なユダヤ人教育の改革ではなく、深くユダヤ教の伝統の中に根をおいて、その同化 (Assimilation) の思想は、ユダヤ教に固有の基本的な信条を犠牲にしたり、稀釈したりすることを断乎として拒否する。同時代のユダヤ人に、ヘブライ語を改善し、非ユダヤ人の文学と科学を解説し、ユダヤ教の伝統的な要素と全ヨーロッパ世界の文化とを結合して、近代ヘブライ文化を創造しようとする。すでに少年の大伯父シモンの時代を過ぎて、少年ハイネ自身のそれにはいつてきた。ハスカラー運動は、まだゲートが壁影を周囲に落している、フランクフルト a.M. でも、「ハスカラー友の会」を産み出し、最初の近代的な学校が創設される。父ザムソンは、その会のメンバーとして活動するのである。1804年のことであった。

さて、ようやくこれでもって、大伯父シモンに別れを告げ、少年ハイネの立っているところへ戻ってきた。そのそばには、いつも母ベティーが立っているといつてよい。前稿(5)を引きつぐことからすれば、ここでゲルデン家の最後の人となる母ベティー・ファン・ゲルデンについて書かねばならない。ゲルデン家には、たしかにハイネ家に比べて、ユダヤ教の伝統が強く各世代に現れていた。デュッセルドルフの町に限れば、ハイネ家は市民としては新入りであり、六代に及ぶゲルデン家は、デュッセルドルフ生え抜きといえるし、市民の間に、ユダヤ教会堂を建てたゲルデン、医者 of ゲルデンと、その名はだれ一人知らぬ者はいないほどであった。ゲルデン家の人たちは、みな敬虔なユダヤ教徒と言われる。少年の大伯父も、世間からは異端視はされなかったであろう。ファン・ゲルデン家には、「ハガダー」(Haggadah) が家宝のようにして保存されていたこ

とを、この大伯父シモンが指摘していると言われ、1931年までケルンのドクトル・H・フランクの所蔵するところになっていたと伝えられる。これを注文して、筆耕職のユダヤ人、M. J. レーブ (Loeb) に書かせたのは、少年ハイネの曾祖父ラッパルス・ファン・ゲルデルンで、1723年のこと。イラストの沢山は<sup>8)</sup>いったハガダーであった。ハガダーは、「過ぎ越し祭」の夜に読まれる祈禱書で、印刷術が発明されたのちも幾百年かの間、手書きされ、手書きの絵が入れられているものもあった。これは贅沢なもので高価だから、一般用品は、木版や銅版に彫られたものの写しがわたるのが慣習となっていた。「回想記」には触れられる箇所がない。少年ハイネが見落したというよりも、貴重品だから、屋根裏部屋で埃をかぶるようなことはなく、伯父シモンの手で大事に、保存されていたのであろう。これがゲルデルン家の門外へ出るのは、ゲルデルン家最後の人、伯父シモンの棺とほぼいっしょの頃であろう。このすべて手書きの多くの挿し絵を折り込んだハガダーを所有をしていたことは、やはり当時のゲルデルン家の家計の豊かさを示している。伯父シモンの亡くなるのは、しばらく後のことである。ゲルデルン家の余裕のある暮らしは、少年の祖父ゴットシャルク在世中 (1726—95) までであっただろう。母ベティーが、医者で、選帝侯の侍医にとりたてられた長兄ヨーゼフの早逝を悲しみながら、その収入がかなりの額であったことを、あわせて惜んでいる。兄ヨーゼフは父を追うようにして亡くなるのである。ゴットシャルクの三人の娘のうち、末娘であったベティーは、次兄のシモンがほとんどゲルデルン家の表面に立って活動する人でなかっただけに、事実上は、ハイネ家へ嫁してから、一門の代表格であった。一番上の娘ブルネラ (Brunella) は、生涯独身であったというが、詳細は明かではなく、次の姉ハンナ (Hanna) も、ただ、デュッセルドルフ近郊の地主に嫁したとだけで、その後の消息は不明である。

パイラ・ファン・ゲルデルン (Peira V. G. 1771-1859) が母の元の名で

8) Ruth L. Jacobi: Heinrich Heines judisches Erbe, Bouvier Verlag 1978, S. 3.

ある。プロートは、エリーザベトとかベティーと呼ぶ名前よりも、バイラのほうがエレガントなひびきを持つと言って、改名を残念がっているくらいである。やがて、ザムゾン・ハイネとの間に生まれてくる子たちが、出生時に届け出られた名は、それぞれ、次男グスターフは、祖父の名を襲ってゴットシャルク、三男マクシミリアンは、マイアー (Meyer)、一人娘シャルロッテは、サーラ (Sara) で、長男の少年ハイネは、ヘリー (Hery) ではなく<sup>9)</sup> なかったと言われる。サーラの名は、後に詩人ハイネの小説「ラビ」の女主人公にも与えられる名であるが、多くのユダヤ人の女性名として好みのもので、エレガントなひびきを持つと言っては、プロートの言うところと通じるかどうか。ところで、少年の母ベティーへの改名は、いつ行わたのであろう。それは、四人の子供の改名の時期とほぼ軌を一にするのでは、と推測される。改名の事など、何だ、と思われるだろう。男の子など、ユダヤ人の名前を持ち、割礼の式をあげてもらふことなどは、ユダヤ人として当然であり、誇りを持ってよいことだろう。縁起をかついだ日本流の改名とは、事情が違う。上述のように、少年ハイネの不確かな名前は別として、母たちが三人の子たちに出生名を与えるのは、フランス革命軍によって、デュッセルドルフが二回にわたって占領される、1795—1801年と1806—13年との間である。この期間に母の名が見られるのは、前稿(4)で述べたとおり、パリーのB.L.フルド宛の手紙(1817年2月)の署名の部分にある、ベティー・ハイネとしてのみである。これは、大分後のこととなる。推測すれば、第二回目の占領にあたる1806年と1813年との間の頃だろうか。この頃の、デュッセルドルフのユダヤ教会堂の火事で、諸記録が焼失したのでなければ、こうした推測は無用の事である。これを無用の用としたい目的は、改名という事柄そのものも持っている意味を考え、直接に改宗に伴うものとは別の現象を見ようとするためである。筆者にとってもそうだが、改名は、なにも重大なことではなく、少年ハイネの母たちにも、

9) Philipp F. Veit: Die Rätsel um Heines Geburt, in Heine-Jahrbuch 1962, S. 20.



時代の流れのままに、誰もがやっている当然の事であったかもしれぬ。しかも筆者が問題にしているのは、当然視される改名現象である。ハスカラー運動は、ユダヤ人たちに近代ヨーロッパの世界へ眼を開かせ、そこに生活する人たちと同じように考え生きようとするユダヤ人を造り出した。このいわゆる「同化ユダヤ人」は、変節者である改宗ユダヤ人と同じように、その名前をドイツ風に改名するのが普通のこととなる。上の段で、少年ハイネのユダヤ名「ヘリー」を曖昧なものとして保留しておいたが、フェイスは、これを少年の父方の祖父「ハイマン」(Heymann)であったにちがいないとしている。すでにハイネ家、ゲルデルン家の父祖たちの名前にも見られたように、同名を名乗る者が随所に現れた。十八世紀末になると、同じ音で始まる名前が、祖先の人たちと類似したものを、子供たちに付けるユダヤ人家庭が、到る処に見られるようになったと言われる。少年ハイネが、デュッセルドルフの子供たちに、驢馬の鳴き声に似せてからかわれた「ハリー」(Harry)名を与えられるのは、「回想記」にあるように、父ザムゾンの取り引き先のイギリス名にならったものではなく、弟グスターフが母方の祖父ゴットシャルクの名を持つように、父方の祖父ハイマン<sup>10)</sup>に通ずる音名として選ばれたとするほうが真相に近いだろうとしている。「ヘリー」名は、後で触れられる、当時のデュッセルドルフのラビ、ショイアー(Scheuer)が、町役場に依頼されて調査したリストに拠るものだが、この方も「ハリー」にはもっと近いように思われる。そうして、これは偶然のことかもしれぬが、「回想記」の中でも、「ハリーは、イギリス人の間では、ヘンリーといわれる者の親しい呼び名です。」と言っている。ただ、「ヘリー」が「ヘンリー」か、など不明瞭な点は残っているし、当時のユダヤ人家庭の慣習にはそぐわないだろう。

さて、人名談議に花が咲いて、少年の母の行方が分らなくなるくらいになった。それほど裏露地、あるいは袋小路をたずね歩いたわけではないと思うが、ここで、本稿の表街道、パイラ・ファン・ゲルデルンのもとへも

10) Veit, ebd. S. 23.

う一度引き返えすことにする。しかし、「回想記」に述べられる母は、ハイネ家の人となったベティー・ハイネ、つまり、少年ハイネとその弟妹たちに取り囲まれた母で、いつか彼らの母となるパイラではない。子供たちとあわせて、母を読むことで事足りるのだが、その前に、僅かながらでも、ゲルデルン家のパイラをしのぼせるものを書きつけておきたい。少年ハイネと「ノアの箱舟」といわれたゲルデルン家の屋根裏部屋のことを、前に述べた。その部屋へいっしょに上ってきた家の猫が、片隅にあった古い笛の紐をお手玉にして、床のあちこちに囁がし廻ってじゃれていた。それはパイラ愛用のフルートで、厳しい父の眼から逃れて、それを吹き鳴らし、この黴くさい部屋を小さな音楽室にしていたものだ。後に母は、少年にピアノを習わせようと、家庭教師を呼んでレッスンを受けさせるが、少年は隙をみては居眠りをして、音楽の才能はなかった、とまことしやかな逸話が伝えられている。母の音楽愛好と息子の音痴、この話は今はやめにしよう。母は父ゴットシャルクによって、音楽からは閉め出された、と「回想記」に述べられるのだが……。そうして、次のような母パイラの像を書き残している：母の信仰は、神を創造主としてだけみとめる、それ以上の力是否認するという、厳格な理神論で、これは当時母が持っていた考え、判断の方向にぴったり合ったものです。母はルソーの信奉者で、その「エミール」を読んでいましたし、子供の教育には自分であたるし、こと教育に関するとなると、どれもが母の一番好きな仕事でした。母自身ひろい教養を身につけていて、すぐれた医者になりながら早く亡くなった兄の勉強相手になったりしたのです。まだほんの少女という年頃からすでに、母は父に言いつけられて、ラテン語の学術論文とか、その他のいろいろな学術雑誌を読み聞かせたのですが、時に質問などをして、老父をすっかり驚かせたことがよくありました。こういう風に母のことを語って、母の考え方、感じ方は健全そのもので、ロマンチックな、空想的な世界を理解する感受性は、それを受けつごうにも、母にはまるでなかったように付言している。それが真実であるかどうかは、もうすぐにハイネ家の人となろう

とする、母パイラ自身がいろいろな場面で見せてくれる。まず、あのフルートが縁となったという、ザムゾン・ハイネとの結びつきの場を現出してみる。

1796年、つまり祖父ゴットシャルクの亡くなった翌年に、母パイラ・ファン・ゲルデルンが、ザムゾン・ハイネとの結婚届を、デュッセルドルフのユダヤ人教区代表へ提出しようとする、思わぬ障害物が待ちもうけていた。すでに、前稿の中世におけるユダヤ人迫害の項にみられたように、とくにフランクフルトの「ゲッター」生活には、さまざまな制限を規定した「ユダヤ人条例」(Stättigkeit)があった。これは、十九世紀前にはまだ多くの地方では、制限項目の多い少ないは別として、完全に撤廃されてはいなかった。その中で、「ゲッター」の存在しなかったベルク公領、そうしてデュッセルドルフでも、ユダヤ人口数を抑制するための結婚数の制限は、昔のままに残っていたのである。ユダヤ人たちは、結婚して新しく家を持つためには、あらかじめそれを可能にする空席がなければならぬ。地区を代表する長老たちにとって、それはけっして望ましいものではなく、なってきたのも、事実である。だが、ユダヤ人教区の側からも、相互扶助の立て前から、もしこの条例を撤廃すれば、万一の場合の同胞の生活保障の問題が、教区側に重くのしかかってくることを恐れないではいられぬ。「ゲッター」内の結婚制限より前に、ユダヤ人追放あるいは収容の例でみられたように、一つの地区への移住と居住の制限があったことは、もちろんである。実質上は、まだハノーバー・ユダヤ人であるザムゾン・ハイネは、結婚許可証のほかに、移住許可、あるいは住民登録認可証をあらかじめ必要とする。パイラ・ファン・ゲルデルンにとって、このような不合理な制限はとうてい認めることはできない。当時のデュッセルドルフのユダヤ人長老代表は十数人であった。その会長は、後に通りを距てて新居に店を張るザムゾン・ハイネの競争相手となる、アブラハム・アロン・コーエン<sup>11)</sup>であり、この時のパイラの申請に反対した一人であった。長老代表会

11) Klaus Schulte, 前掲書 S. 108, 111.

が、パイラの申請を大筋で受け入れることに傾いたのは、もうゴットシャルクは亡くなり、シモン・ファン・ゲルデンひとりの代であるが、やはり町での名家ゲルデンがうしろに控えていたからである。しかし、最後に長老代表会の持ち出した、同日付で二つの認許証をいっしょに交付しようという妥協案にも、パイラは頑強に抗議をつづけた。パイラにとって、移住許可は問題ではなく、目的は結婚許可であり、本来前者と後者が同時に行われることは不自然だと考えられたのであろう。また、代表会側の案には、結婚を前にして、万一パイラに急死でもされると、残ったザムゾンの居住許可を撤回するわけにゆかず、余計な家持ちの新来者に、教区内の制限員数をくわれることになる、そういう下心が見えたのである。パイラは、この妥協案を拒絶し、問題は一時は宙に浮いたままになったが、逆に言えば、パイラとザムゾンとは、いまは自由にどんな行動でもとることができる。しかし残されているものは、自分たちで教会堂へ出かけるほかはない。一方では、ユダヤ教区を統括するラビは、ユダヤ教義の掟に背かぬ限り、結婚の挙式を、拒否することはできないし、当時としてはもう半ば公然と認められる傾向にあったと思われる。このラビが、前にその名をあげたシヨイア師 (Juda Löb Scheuer) であった。ユダヤ人口が300~400人であったデュッセルドルフのユダヤ人教区のただ一人のラビで、同時にユーリヒ・ベルク公領代表 (Landrabbiner) でもあった。ナポレオンが、こ町に騎馬姿で入城して来た時、皇帝への歓迎の辞を述べた人といわれる。たしかに、上の結婚についての問題では、パイラが独力で、古いユダヤ人の生活慣習に抵抗して、その目的を達成したといえるが、一つには、旧来の陋習は時と共に崩れ去ろうとしており、また一つには、ゲルデン家、それに手をこまねいて傍観していたように見えるザムゾン・ハイネの存在していたことが目につく。陽気で明るく、楽天家のザムゾンは、町の警防団の幹部にも選ばれるし、シナゴークの聖務に、例えば、埋葬のこと、貧者救済、旧約聖歌朗読の会といった、比較的の下部の組織活動に参加して

12) Veit, ebd., S. 14.

いた。後者の、慈善会、朗読会では、その世話人頭選ばれていたほどに、かなり広い町民層に愛された人物である。こうした点では、ユダヤ人長老会員にも選ばれなかった、ゲルデルン家当主のシモンとは、対照的である。兄シモンは、その名のとおりに奇人然として孤高を守りつづけたのであろう。それに、ハノーバー訛りの、ヘブライ・ドイツ混合（イディッシュ）語を話すザムゾン・ハイネは、いくらかの間をおいてはこの土地へ来て宿泊し、ごく自然にデュッセルドルフの人となっていた。ハンブルクなどへも足をのばすザムゾンにとっては、「移住許可」のことなどほとんど問題にならないだろう。非公式には、独り者は、かなり自由に他国の町に出入りし、しばらくは居住することもできるようになってきている。こんどのパイラとの結婚という問題ではじめて、公式にザムゾンの存在が表面に出ると、資産もほとんどないことまで嗅ぎつけられて、長老会の一部の者から厳しい眼で見られることになった。かねてこの事があるかと、あらかじめそれに備えてのことでなく、その持前の気質からごく自然に町の世話役を進んで買って出てきたのだ。ザムゾン・ハイネ自身の姿に、ただユダヤ教同信者のために、祖先伝来のユダヤ教のためにだけでなく、キリスト教派の人たちのためにも、誠心誠意をもって尽くすことを喜びとする、ひとりの人間が見られる。ラビ・ショイアーが、こうしたザムゾン・ハイネをまったく知らないはずはなく、むしろラビは、快く教会堂の祭壇の傍から、ザムゾンとパイラの新らしい門出を祝福したであろう。すこし後になる、手ぜまな最初の家から引越した、最後のデュッセルドルフの屋敷内には、キリスト像をもつ小さな礼拝堂もあったという。そこで、ユダヤ教に定められた諸儀式は昔ながらに取り行われたのである。パイラとザムゾンの結婚の挙式が行われたのは、1797年の始め、少年ハイネの生れたのは、1798年の始め、そう言われている。

詩人ハイネの生年（1797）については、最初からさまざまな推測が行われていて、他の多くの詩人ハイネをめぐる謎の一つとして取り沙汰されてきた。シュトロットマンは、ハイネ死後10年目に、前掲書「ハインリヒ・

ハイネの生涯と作品」の中で、1799年を挙げているといった具合に、とくに戦後は、F. ヒルト、W. ヴァーデプールのような研究者たちに、この謎解きは引き継がれてきて、筆者が本稿で多くを負っているフィリップ・ファイトの「ハイネの出生をめぐる謎なぞ」論でようやく終止符を打たれた形になった。その生年と想定された1797—1800年のうち、後者は論外のものとして、ほぼ3年の何れが真実の生年であるかが、論議的であったが、それを混乱させたのは、詩人自身をはじめとするハイネ家に属する人たちであった。ファイト論文が、手際よくこれを整理したその鍵の入手は、生年がもともと常用歴ではなく、ユダヤ歴に拠っていることに注目したことにはじまる。その論証は見事で、それはひとり詩人ハイネの生年だけではなくて、母を始めとし、弟妹たちの生年の訂正にまで及んでいる。少年ハイネをはじめとする三人の兄弟たちの生年が、プロシア軍の課した兵役から逃れるために、3、4年繰り下げられたと言われることは、今は別として、とりわけて筆者の注意を惹くのは、やはり新家庭ハイネ家の礎石にユダヤ教の伝統が刻み込まれていることである。母ベティーは生涯を通して、その誕生日をユダヤ歴によって祝った。誕生日に限らず、ユダヤ教の定めた祝祭日を中心にして、重要な家事がそれによって運ばれる。イディッシュ語が、両親の主な話し言葉である。これらのしきたりが、次の若いハイネたちの世代で捨てられてゆくのは言うまでもないが、1813年1月6日に、少年ハイネが両親の結婚を祝って書いた詩は、その出来栄は別として、ユダヤ歴に拠った日付であった。<sup>13)</sup> 高等学校時代の、学友が伝える逸話として、多くのハイネ評伝に取り入れられている、火事だというのに、今日はサバト (Sabbat, ユダヤ教の安息日) だからと言って、火消しのバケツ運びを拒んだというお話。<sup>14)</sup> しかし、この安息日を大切にする慣習は、後の1811年後に、ザムゾン・ハイネ商会が営業不振に陥り、ハリー商会になってからも、手形を拒否する時に、今日はサバトだから……と署名をことわ

13) Elster: Heines Werke (1924) I. 213.

14) Houben, 前掲書 S. 8.

る便宜手段に変わるときどき利用されている。<sup>15)</sup>

ゲルデルン家に伝承された「ハガタ」の行方は、十八世紀末、ないしは十九世紀はじめの、ユダヤ教の伝習の様子が少しずつ変わってくる、その径路の行手と一致している。ゲルデルン家により強く残っていた儀式、行事を引き継いだハイネ家で、少年ハイネたちの世代で、それらがどのように受けつがれ、捨て去られて後に、また新しく取り上げられるのか、それを若いハイネで見てゆくことも、これからの筆者に課せられた仕事の一つである。「柱のキズは、おとどしの……」という日本の歌にあるように、若いハイネにとって、ユダヤ教義の心と教えの痕跡は、一つ、また一つ、とその成長の跡を示すものである。それはけっして、心の傷痕ではないだろう。

上に、少年ハイネの、母への誕生祝の4行詩のことを書いたが、7才頃には、妹を相手に「尻取り遊び」に似た、「押韻遊び」<sup>16)</sup>を始める。14才で作った、結婚祝の8行詩も残っている。17才の高校生時代の、110行ほどの詩も。母はそれから遠ざけようとするのに、少年は詩を読み、書こうとするのである。

---

15) Schulte, S. 112ff.

16) Houben, S. 6.